

## 42号の刊行にあたって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Adachi, Takuro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00061620">http://hdl.handle.net/2297/00061620</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 42号の刊行にあたって

足立 拓朗

(人文学類 考古学・文化資源学プログラム)

## 1. 特集：コロナ禍における博物館の実態と役割

今年度の金沢大学考古学紀要には8篇の論考が寄稿された。コロナ禍のため、例年開催していた考古学研究室の研究会（考古学大会）は実施できなかったが、本紀要には「特集：コロナ禍における博物館の実態と役割」を掲載した。本特集は、研究室卒業生の多々良穰氏によって提案され、岩田安之氏、小松隆史氏を含めて3本の論考が揃った。まさに今年度にふさわしい特集である。コロナ禍のなるべく早い終息が望まれるが、昨今、コロナ禍に対して長期的な対応が必要となる可能性も指摘されている。本特集が今年だけの「対コロナ禍の博物館活動」論考となることを祈念したいが、コロナ禍時代初年の博物館の取り組みを記録した、という意味の重要な特集と位置付けられる可能性もある。いずれにせよ将来の博物館関係者にとって学史的に価値のある特集と言えるだろう。今後も卒業生に関わらず、考古学研究室関係者による本紀要の特集企画を掲載していきたいと考えており、そのような企画をお持ちの場合はご相談いただければ幸いである。

## 2. 人文学類 考古学・文化資源学プログラム

2016年度にスタートした「特別プログラム：考古学」は、今年度12月にプログラム4期生が確定した。第4期のプログラム生は、フィールド文化学コースから2名、歴史文化学コース（日本史主履修分野）から2名の合計4名となった。金沢大学の考古学研究室として、彼らは第47期となる。そして、彼らが「特別プログラム」制度の最終学年である。2020年度入学生は「考古学・文化資源学プログラム」に所属することになる。この「プログラム」は「特別プログラム」とは異なり、2020年度から、人文学類のコース制がプログラム制に変更したことによる「プログラム」である。「考古学・文化資源学プログラム」は「フィールド文化学コース」を母体として発展したものである。考古学研究室で主体的に研究する学生以外の文化遺産学研究室、比較文化学研究室の学生も含まれる大きな枠組みとなっている。プログラム所属は2年次からであるため、現時点（2021年2月中旬）では、この新プログラム制に何名所属するのかわかっていない。そのため実質的には2021年度から本プログラムが始動する。

これまでの「特別プログラム：考古学」では、中村慎一教授（中国考古学）、足立（西アジア考古学）の二人の教員体制であったが、「考古学・文化資源学プログラム」ではさらに河合望教授（エジプト考古学）、覚張隆史助教（考古科学）が加わる。河合と覚張はこれまでも研究・教育で考古学研究室と密接に連携してきたが、今後は考古学研究室自体の強力な戦力として期待される。

## 3. 超然プロジェクト：古代文明の学際研究の世界的拠点形成

本プロジェクトは河合がプロジェクト・リーダーを務めており、また、中村、足立、覚張の他の考古学研究室教員もプロジェクト担当者を務めていることから、考古学研究室の合同研究テーマとして重要な位置を占めている。本プロジェクトは国際文化資源学研究センターの中村誠一教授（マヤ考古学）とも密接に連携しながら進めている。本紀要には、これらの教員の研究業績は掲載されていないが、佐々木達夫氏、佐々木花江氏の西アジア考古学に関する調査報告、大谷育恵氏による北方ユーラシアの考古学の論考、小川雅洋氏のマヤ考古学の論考が掲載されており、広い意味で本プロジェクトの成果の一部となっている。今後も本紀要で超然プロジェクト：古代文明の学際研究の世界的拠点形成の成果を発表していく予定である。

#### 4. 考古学研究室関係文献のデジタル化について

2020年度の教育活動を進めていく過程で、金沢大学考古学研究会の活動報告の一部が図書館のデジタル・アーカイブ（学術情報リポジトリ KURA）で未公開のものがあることがわかった。研究会の活動報告は1970年代、1980年代に刊行されたものであり、現在、これらの報告は入手が困難なものもある。今年度は以下の考古学研究会の刊行物をデジタル化した。デジタル化にあたっては、本学卒業生の河村好光氏から状態の良い貴重な図書を拝借した。今後、このような過去の関連刊行物を可能な限りデジタル化し、大学図書館で一般に公開していく計画である。

金沢大学考古学研究会（1975）『金沢大学考古学研究会活動報告』第1号

金沢大学考古学研究会（1976）『金沢大学考古学研究会活動報告』第2号

金沢大学考古学研究会（1978）『辰口町湯屋古窯（仮称）寺井町和田山下遺跡（仮称）調査略報』

金沢大学考古学研究会（1981）『金沢大学考古学研究会活動報告』第3号

金沢大学考古学研究会（1986）『辰口町湯屋古窯跡群調査略報 第2号』

金沢大学考古学研究会（1986）『金沢大学考古学研究会活動報告』第4号

#### 5. 2020年度卒業論文発表会と今後の研究室

2020年度の卒業論文発表会は2021年2月11日（木・建国記念日）に金沢大学サテライトプラザ（金沢市西町教育研修館）で行われた。特別プログラム：考古学の学生5名（フィールド文化学コース4名・歴史文化学コース1名）に加え、プログラム生ではないがフィールド文化学コースで考古学を卒業論文とした学生2名、合計7名の発表が行われた。今年度も資料を実見し、実測や拓本、撮影を実施して論文を作成した学生が複数おり、資料閲覧にご協力をいただいた方々を発表会に招待した。今年度は、本田秀生氏（白山ろく民俗資料館）、腰地孝大氏（野々市市教育委員会教育文化部文化課）、松井広信氏（富山県埋蔵文化財センター）の3名が参加され、貴重なご意見をいただいた。会終了後に全員マスク姿で記念撮影を実施した（図1, 2）。本紀要の135頁に今年度の卒業論文概要を掲載している。

2020年10月に金沢大学で開催予定だった、日本考古学協会の秋季大会はコロナ禍のため、2021年度10月16～18日に延期となった。次号では日本考古学協会2021年度金沢大会の活動報告をすることになる。

本書、『金沢大学考古学紀要』は、金沢大学附属図書館学術情報リポジトリ KURA で、冊子体版と同じ内容のPDF（カラー版）を一般公開している。また、考古学研究室ではWeb版の小雑誌『金大考古』も刊行している。こちらは研究室主催の考古学大会で発表された論考などを中心に編集しているが、ある程度は頁数に制限なく掲載できることが特徴である。これも KURA で無料一般公開している。ご覧いただければ幸いです。



図1 2020年度卒業論文発表会後の記念撮影



図2 2020年度考古学研究室卒業生